国際金融危機

今宮謙二

今宮　謙二（いまみや　けんじ）
1929年生まれ
中央大学商学部教授
著書　「現代資本主義と国際通貨体制」（汐文社）
「マルクス主義為替理論の研究」（青木書店）
「現代国際金融の構造」（実教出版）
「講座　日本の金融機構」下巻（共著，新日本出版社）

国際金融危機

1981年7月25日　初　版
1984年4月25日　第2刷

定価 1600円

著者　今　宮　謙　二
発行者　松　宮　龍　起

郵便番号 151　東京都渋谷区本町1—8—7
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　東京（320）7111（代表）
振替番号　東京　3—13681
印刷　亨有堂印刷　　製本　古賀製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします．
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

国際金融危機

今宮謙二 著

新日本出版社

まえがき

本書は、私にとって国際金融の現状分析にかんする三冊目の本であり、主として一九七七年以降、雑誌『経済』などを中心に発表してきた論文を大幅に加筆し、まとめたものである。

前著『現代国際金融の構造』(実教出版)を刊行した時ちょうどジャマイカ合意がおこなわれた直後で、その「あとがき」に追記としてこの合意は現状の追認にすぎないと書きとめた。このような認識は当時も、あるいは現在においても有力なようであるが、本書ではこの考え方をあらため、ジャマイカ合意＝IMF第二次協定改正が一九七〇年代、そして今後の八〇年代に重要な意義がある点を強調した。これが本書の第一の特色となっている。第二の特色は、タイトル『国際金融危機』にあらわしたように現在の国際金融危機を、国際的信用構造と国際通貨危機の二つの重層的危機としてとらえようとした点である。ただしこのとらえ方についてはまだ実証分析も不備であり、実態解明にはほど遠く今後の課題として残されている。第三の特色は、国際金融危機を資本主義世界の構造的危機の一環としてとらえる立場をつらぬいた点である。しかしこれもまだたんなるスケッチでしかなく、今後、分析をいっそう深めねばならないと考えている。第四の特色は、新しい国際金融秩序再建を本当の意味で全世界的規模にまで広げて考える点を強調したことである。今後、非同盟諸国の提案している「新国際経済秩序」のなかで国際金融秩序をどのように位置づけるべきかの課題が残されている。もはや新しい国際通貨制度再建はこれまでのような資本主義諸

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

国中心の制度では不可能である点を本書では強調した。

そのほか本書ではたそうとしてできなかった点について若干のべておきたい。一つは、第二章で取りあつかっているドルの国際的流通の根拠をめぐる問題についてである。第二章第三節の最後の注でもふれておいたが、この点についてその後いくつかの議論がおこなわれている。はじめの予定としては第二章の第四節に「若干の論争点をめぐって」と題してこれらの論点について考えを書くつもりで準備をすすめてきた。しかし、この問題は世界貨幣としての金とのかかわりなど重要な論点をふくみ、簡単なコメント程度では問題が片づかないことが明らかとなってきた。現在、私は本書を刊行したあと、現代における金と国際通貨について考えをまとめる計画をもっており、この問題はこれとの関連で検討することとして、本書では注としてごく簡単にふれるだけにとどめておいた。

なおこの点についてもう一つのべておきたいことは、私の主張した「強制通用力の国際的適用」の概念についてである。この概念をはじめに主張したのは前掲拙著であり、そこでは試論的なもので非常に不備であったので、その後『経済』一九七七年三月号にこの考え方を具体的に発展させて書いた論文が本書の第二章に収録したものである。本書に収録するにあたって若干の注や加筆をおこなったが、ほとんど発表時のままである。ただし、はじめに「強制通用力の国際的適用」という表現をしたために、強制通用力は国内的概念であり、それを国際的に適用すること自体がナンセンスという解釈をされ、私の主張した内容が理解されない向きも多いので今回この表現をややわらげておいた。しかし私の立場は基本的に変わっていない。

次に現状分析としてもたとえば欧州通貨制度（ＥＭＳ）への評価や、オイル・マネーのくわしい分析、発展途上国債務問題の細かい検討など、数えあげればキリがないほどたくさんの問題が残されている。こ

れらの諸問題はその後の国際金融動向を検討してゆくなかでひとつひとつ明らかにしてゆきたいと考えている。

残された問題の三つめは多く第一篇にかかわることであり、とくに為替相場とインフレーションの関係についてである。これもたんなる試論的なものであり、分析は抽象的本質論に終始しており、これをいっそう具体化する必要がある。この点についても当初かなりの加筆をする予定でいたが、これもまた問題が多方面にわたり、とくに為替相場論のいっそうの展開が必要であることなどから本書ではほぼ発表当時のまま収録した。

次に本書のもととなった論文を左記に掲げておこう。

「金と国際通貨の基礎理論」『経済』一九七一年十一月号……第一章

「交換停止後のドルと金」『経済』一九七七年三月号……第二章

「インフレーションと為替相場」『商学論纂』一九七四年三月……第三章

「インフレーション論の展開と問題点」『現代と思想』第一八号、一九七四年十二月……第四章

「資本主義世界経済の構造的危機」『経済』一九八〇年五月号、「大恐慌五〇年と現代」『学生新聞』一九七九年十月二十四日号……第五章

「国際通貨政策の民主的方向」『前衛』一九七七年六月号……第六章・第十章

「一九六〇年代の国際金融――桑野仁氏の見解を中心に――」『商学論纂』第二二巻第四・五・六合併号、中央大学商学部七〇周年記念論文集第二分冊、一九八一年三月……第七章

「国際通貨危機の新様相」『経済』一九七九年十二月号……第八章

「円急騰の背景と円高政策」『前衛』一九七七年十二月号、「国民生活を直撃する円安」『赤旗・評論特

集版』一九七九年十二月十七日、「円防衛緊急策と米通貨戦略」『前衛』一九八〇年五月号、「円高・円安の客観的背景」『前衛』一九八一年一月号……第九章

以上であるが原型をとどめているのは、第二章、第三章、第四章、第七章ぐらいであり、そのほかは大幅に加筆されている。なかにはバラバラとなった論文もあり、たとえば、「円高・円安の客観的背景」は一部分が第一章第五節に編入されている。第二篇の現状分析については、重複した部分が多く、そのためかなりの削除をおこなった。第八章などはすっかり書き変えてあり、元の論文の面影はないが、論旨は変えていない。

また第一章第三節は「国際通貨危機とドル減価論」と題して『現代と思想』第一〇号（一九七二年十二月、青木書店）に発表した一部である。この論文の前半は拙著『マルクス主義為替理論の研究』（青木書店、一九七四年）にそのまま収録したが、今回あらためてここの部分だけ加筆や注をくわえ、またタイトルも変えて取りいれた。この部分は金問題を基本的にどう考えるかの本質論を指摘したもので、解説的な第一章に必要と考えたからである。ただし、この具体化についてはさきにのべたように今後の研究計画にあり、ここでは一切ふれていない。私の国際金融論研究の方法の一つとしてあくまでも、「自主的思想、自主的理論、自主的政策」（レーニン『帝国主義論ノート』全集第三九巻、大月書店版、五ページ）をこころがけているが、その成果はなかなか思うようにすすまないのが現状である。

最後に、現状分析の道へ導いていただいた桑野仁先生が一九八〇年三月になくなられたことを記しておきたい。本書の第七章は先生の追悼の意味も兼ねている。先生と基本的な点で意見は一致していたが、細かい点ではかなりくい違っていた。私が変わった意見を言いだし賛成されない時、先生は黙って首をかたむけられていた。本書のなかにもずいぶんと首をかたむけられた部分が多い。先生のご冥福をお祈りした

い。

本書は、新日本出版社編集部の小栗崇資氏のおすすめでこのようにまとめることができた。厚くお礼を申し上げる。なお「為替インフレーション」論争を取りあげた第四章ではいっさいの敬称を省かせていただいた。その点の非礼をお詫びしておきたい。

一九八一年五月二日

今宮謙二

目次

まえがき

第一篇　国際金融危機の基礎

第一章　国際通貨・為替相場の基礎……17

はじめに……17

一　貨幣が金である理由……19

二　兌換制と不換制……24

三　現代における金の役割……27

四　為替相場の基本……33

五　為替相場の変動要因……39

第二章　「国際通貨ドル」の流通根拠……45

一　不換制下の国際通貨とその矛盾……45

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

二　国際通貨の現実的規定……49
三　「国際通貨ドル」の流通根拠……57
第三章　インフレーションと為替相場……68
はじめに……68
一　「為替インフレーション論」について……70
二　為替相場と価格変動の関係——(1)……75
三　為替相場と価格変動の関係——(2)……79
四　資本流出入による為替相場の変動……83
五　むすび……88
第四章　「為替インフレーション」論争……91
はじめに……91
一　猪俣津南雄のインフレーション論……92
二　笠信太郎のインフレーション論……101
三　猪俣・笠論争の展開……105
四　猪俣・笠論争にたいする戦前・戦後の評価……117
五　むすびにかえて……129

第二篇　一九六〇・七〇年代の国際金融危機

第五章　資本主義世界経済の構造的危機……135
はじめに……135
一　「高度経済成長」の土台と枠組み……138
二　過剰蓄積体制の矛盾……142
三　一九二九年大恐慌との対比……150
四　アメリカ世界支配再編成の動向……156
第六章　ブレトン・ウッズ体制の危機……158
はじめに……158
一　国際金融危機のとらえ方……159
二　ブレトン・ウッズ体制におけるＩＭＦの地位……162
三　ブレトン・ウッズ体制の危機――(1)……165
四　ブレトン・ウッズ体制の危機――(2)……169
第七章　一九六〇年代の国際金融危機……173
――桑野仁氏の見解を中心に――
はじめに……173

一　一九六〇年代の国際金融の特色……174
二　桑野仁氏の国際通貨危機論……185
三　むすび……197
第八章　一九七〇年代の国際金融危機……200
はじめに……200
一　現行の国際的二重為替相場制と国際信用構造危機……202
二　金相場乱高下の実態とその意味……213
三　ジャマイカ合意＝IMF第二次協定改正の意義……220
第九章　円高・円安の諸問題……224
はじめに……224
一　円相場変動の実態……224
二　円高とアメリカの円圧力戦略……227
三　円安出現の原因と円安防止政策……240
四　円防衛緊急政策……245
五　円高・円安の客観的背景——わが国輸出構造を中心に……250
六　むすびにかえて……259

第十章　新しい国際金融秩序再建のために……262
一　国際金融危機の現状……262
二　国際金融秩序の民主的再建のために……267

第一篇　国際金融危機の基礎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co